

「忘れること」の分析

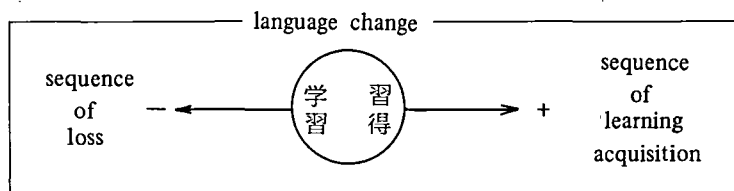
— ‘language loss’ の理論と実践 —

広島大学教育学部 深 沢 清 治

1 「忘れること」の分析

従来までの外国語教育においては、効果的な教授法・教材を求めて、input 中心のアプローチがとられてきた。さらに、近年の言語習得過程の研究の進展から、言語の学習、習得は一定の蓄積過程とみなされ、その可変性にはあまり注意が向けられていないのではないと思われる。たとえば、いったん学習・習得された技能が時間の経過や未使用によって忘れられることは認められても、その特徴や過程についてはあまり関心が払われていないのが実状であろう。

次の図で表わせば、従来はいかに外国語学習を促進するか、つまりプラスの方向に重点が置かれ、誤答分析にしても「忘れること」は無視した、学習・習得の発展の線上における逸脱した発話の分析とも言えよう。ところが、たとえば母国語からの干渉により誤りが生じたとしても、学習事項を忘れたために母国語の相似事項でやむなく代用した結果である場合も考えられ、誤りの生じる以前の忘れることのメカニズムの分析、つまりマイナスの方向への研究上の視点も必要ではないだろうか。学習の過程で生じる誤りのうち、Ingram (1975:266) によれば、学習者が最も悩むのは単語や構造の誤用よりも、忘れたことにより想起できないことにあるという。



このような忘れることのメカニズムの研究は ‘language loss’ あるいは ‘language attrition’ と呼ばれている。その目標は教えることの長期的な影響について知ることであり、特にどのようなタイプの学習者がどんな技能をどのくらいの時間経過で、また、どのような環境の下で失なっていくのかを調査するものである (Oxford 1982b: 167)。

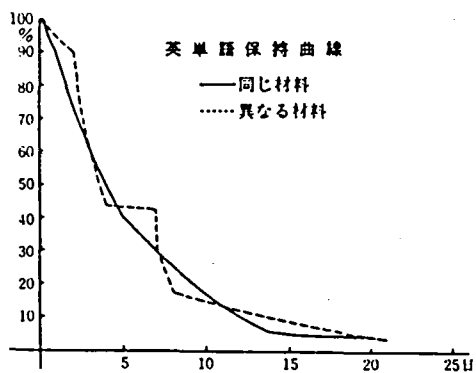
Language loss の研究は、厳密には学習・習得が全く停止した時点からを対象とするが、日本のような EFL として限られた環境にも適用できるものと考え、本研究ではこれまでに発表されたいくつかの試みを概観し、さらに身近な教室場面での調査から、英語教育への応用可能性を探ることをその目的とする。

2 Language Loss 研究の実践例

Language loss の研究はまだ歴史が浅く、その最も初期の研究のひとつに、Kennedy (1932) がある (Valdman 1982: 136)。それによれば、夏休みをはさんで、ラテン語の履習を続けることを希望するグループとそうでないグループについて、32問の文法に関する多肢選択テストを受けさせ正答が

保持された割合でみたところ、前者の方が保持率が高かったという。このことから、外国語学習を続けようとする意欲が保持率に影響することが示唆されている。Language loss の研究は、その後、いくつかの言語あるいは技能別に行なわれてきている (Oxford 1982a: 124-128, Oxford 1982b, Valdman 1982: 156-159)。その中で、Smythe *et al.* (1973) は、カナダのオンタリオでフランス語を学習する中等学校の生徒を対象に、(1)夏休み期間中、(2)夏休みと一学期の未習期間、の2つを通して第2言語の保持を調査したところ、リーディングについてはわずかながら下降、逆にリスニングについてはわずかながら上昇する結果を得ている(いずれも有意差あり)。その結果、夏休みには第2言語学習の保持を促進する働きがあると結論づけている。技能別の保持率に関する他の研究として、Edwards (1976) は、カナダにおける公務員採用者への2言語訓練終了後の期間の長さとしてリーディング、リスニング技能の保持の関係をみたところ、リーディングは伸びたのに対して、スピーキング力は低下したと報告している(いずれも有意差あり)。また、平行して被験者に行なったアンケートから、第2言語技能の保持には意欲や第2言語への態度よりも、使用機会などの環境的要因が関連のあることを指摘している。また、外国語の技能が低下していく度合は各技能間で異なると述べる Lowe (1982) は、スピーキングが最も不安定で、次いでリスニング、そしてリーディングは最も安定した技能であると経験的に述べている。

これまでに述べた技能別の保持率に関する研究に対して、その下位項目について上岡 (1982) が特に語いの面から調査している。これは英単語の忘却率を横断的に測定したもので、被験者は高校1~3年生である。その調査においては未習教材から新出語を毎回10語ずつ提示し授業中に12分間で暗記させ、フラッシュ・カードで2回続けて意味が言えた生徒を対象に、学級別に学習後1~21日後に再び言わせてその忘却率をみる方法がとられている。学級別に同じ材料と異なる材料に分けて、その忘却曲線は右のように示されている。結論として、単期記憶の忘却曲線と一致し、一般的な目安として、1日後90%、3日後60%、4~7日後40~30%、14日後10%の保持率を設定している。



上岡 (1982: 45)

ここに挙げたいくつかの研究例や現在までに行なわれた諸研究からも、いったん学習した外国語を忘れることに関して一般的な傾向さえ述べることは困難である。しかしながら、すべての技能が同じ速度で忘れられていくのではなく、また、それには社会、学習環境が大きく影響していると言えよう。

3 単語の忘却に関する一研究

Language loss の諸研究を教育への実践に応用するひとつの手段として、忘れられやすいもの、あるいは覚えられにくいものは何かを採り出すことがあろう。たとえば、新出単語の忘却率に関しては先述の上岡 (1980) がある。上岡氏の研究は異なった生徒に異なった日数後の英単語の保持率を測定したものである。これに対して、筆者は同一被験者を対象に、同一のテスト項目(単語・イディオム)により保持率を縦断的に調査しようと試みた¹⁾

1) 本調査に際して、全面的に協力して頂いた広島大学附属高校の松浦伸和教諭に感謝申し上げます。

被験者：広島大学附属高等学校 1 年生 38 名（男子 22 名，女子 16 名）

調査日：中間テスト 昭和 58 年 5 月 26 日

第 1 回テスト 6 月 2 日

第 2 回テスト 6 月 30 日

材 料：Word Power 3000 (O. U. P.) より 30 問（多肢選択方式）

(例) 1. Peter was absent () school yesterday.

1. at 2. for 3. from 4. of

結 果：

	第 1 回	第 2 回	t
平 均	23.24	25.03	4.3855***
SD	5.47	4.33	

($p < 0.001$)

本調査においては、定期考査の際に用いられたテスト項目と同一の項目をテスト後、1週間後および5週間後に実施した。テスト材料は定期考査の自習範囲となっていたものである。ただし、定期考査においては問題形式は客観式・記述式など複数の方式が採用されていたが、本調査においては集計の簡便さを考慮して、定期考査の際と同一の単語の問題30問をすべてもとの多肢選択方式のまま提示した。第1回テストは定期考査の解答配布直前であり、第2回目のテストと同様、事前の予告なしに行なわれた。

2回のテストの結果、事前の予想と異なり2回目のテスト成績が統計上も明らかに伸びていることがわかった。これには被験者の質の他にもいくつかの理由が考えられる。第1に、テスト項目がほとんどすべて既習語の範囲内であったため、易しすぎたことが考えられる。第2に、多肢選択式という問題形式も高成績に影響したと思われる。また、第3に合計3回のテストで、学習心理学という「練習の法則」により逆に伸びたことも考えられる。

そこで、全体の成績から個々の問題ごとの項目分析を行なった。そして、第2回目のテストの誤りを次の2つに分類し、その特徴をまとめてみた。

(第1回)

(第2回)

①覚えられにくいもの

誤

誤

②忘れられやすいもの

正

誤

①覚えられにくいもの：全体として、意味区分に関する問題に誤りが多い。典型的なものは次の問題であった。

(例)

Be careful how you carry that cup of tea! Don't () it!

1. drop 2. spill 3. spoil 4. fall

また、前置詞・動詞によるイディオム (Look it up in the dictionary. belong to, become of), 決まり文句 (my pleasure) などにも誤りが多かった。また、次のような問題に際して expect/except の綴りの似た単語の混同は特に今回のテスト平均の下位群に集中していた。

Do you think it's going to rain? Yes, I () so.

②忘れられやすいもの(2回目に現われた誤り):ひとつの特徴として,ここでは次の問題での単語の選択上の誤りが今回のテスト成績上位群に集中していた。

Do you get many eggs from your chicken?

Yes, they () a lot of eggs.

(lie/lay)

このほか, pay/cost, fall/drop, just/only などの意味区分に関する誤り, my pleasure (please と混同), belong to, などのイディオム, pass/past のつづり, などが2回目に現われてきた誤りであった。

このような少ないデータからは信頼できる結論を導き出すことはできない。強いてあげるならば, 単語の意味区分に関して覚えにくい, あるいは忘れやすいものがあること, さらに成績上位群/下位群について, ひとつの特徴的な例がみられたこと, が挙げられよう。しかしながら, いずれも今後の再検討を要するものである。

4 まとめと展望

本論に示したこれまでの諸研究, あるいは筆者の調査について以下にまとめるとともに, 今後の展望について言及したい。筆者の調査では, 時間の経過と共に忘却が進むという仮説は支持されなかった。このことはまず, 実験方法の検討を意味しているものと思われる。たとえば, 習いたての新出語, あるいは記述式のテスト形式であれば異なった結果が得られたかもしれない。また, 今回はデータが少ないため傾向を述べるに留まったが, より多くのデータ収集により, 外国語学習における忘れることのメカニズムが, たとえば技能別, 言語項目別に, より明確に把握できるであろう。ここでは, 覚えにくさや忘れやすさを個々の単語別に述べたにすぎないが, たとえば学習する際のレディネスや学習の効果, あるいは練習の役割, また先行抑制, 逆行抑制など記憶に関する心理的要因分析も必要であろう。今後, 忘れることに関する分析を進めることにより, 従来の習得中心のプラスの方向の研究と合わせて, 教材編成, 教授法, 学習間隔と学習効率の関係, あるいはカリキュラム・シラバス構成に至る, 興味深い示唆が得られると考える。

〔参考文献〕

- Cohen, A.D. (1975) "Forgetting a Second Language," *Language Learning*, 25, 1, June, 127-138.
- Edwards, G. (1976), "Second-Language Retention in the Canadian Public Service," *Canadian Modern Language Review*, 32, 3, Feb., 305-308.
- Ingram, E. (1975), "Psychology and Language Learning," J.P.B. Allen and S.P. Corder (eds.) (1975), *Papers in Applied Linguistics*. Oxford University Press. pp. 218-290.
- Lambert, R.D. and B.F. Freed (eds.) (1982), *The Loss of Language Skills*. Rowley: Newbury House Publishers, Inc.
- Lowe, P. Jr. (1982), "The U.S. Government's Foreign Language Attrition and Maintenance Experience," in Lambert and Freed (eds.) (1982: 176-190).
- Oxford, R.L. (1982a), "Technical Issues in Designing and Conducting Research on Language Skill Attrition," in Lambert and Freed (eds.) (1982: 119-137).
- Oxford, R.L. (1982b), "Research on Language Loss: A Review with Implications for Foreign Language Teaching," *Modern Language Journal*, 66, 2, Summer, 160-169.
- Smythe, P.C. et al. (1973), "Second-Language Retention Over Varying Time Intervals," *Modern Language Journal*, 57, 8, Dec., 400-405.
- 上岡光雄(1982)「英単語は学習された後, どのように忘れられてゆくか」『英語教育』(大修館書店)1982年10月号, 42-47.